BLUE - 空色*水色*恋の色 -

kazu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLUE - 空色*水色*恋の色 -

【Nコード】

N9229I

【作者名】

k a z u

【あらすじ】

知っている方もいると思います。毎月5日、20日に発売されている、マンガ雑誌で、只今連載中のBLUEというマンガを小説にしたものです。ついでにマンガでは千葉コズエさんが書いています。ストーリーも面白く、楽しめるものだと思います。マンガの方も、面白いので、見たことが無いという人はぜひ少女コミック雑誌「Sho-Comi」を購入してください。BLUE以外にも、大人気連載中「好きです！鈴木くん」池山田 剛「今日、恋をはじめます」水波 風南などが載っています。オススメです。・：・。 \ (^

-
^
)

1話

君たちの存在は、この青い海に似てる。深く優しく透明な本物のB LUE。

ぼくたちの友情は、いつ恋に変わったんだろう 私たちの心は、いつからこの色に染まったのだろう
忘れられない恋物語が、今始まる。

3年ぶりに、この島に帰ってきた。海が綺麗で、空も綺麗で、誰も懐かしさを描く島。

船でしか、行けないこの島は、私の故郷。

「たっだいまー!!」

私は、そう叫び船からジャンプしておりた。すると、懐かしみのある人がこけそうになった私の腕を支えた。ノースリーブの黒い服を着ている人。

「・・・う・・・わぁ・・・!」

私は、感動と驚きの声を漏らした。

「陽介だよね!? 背、伸びた?」

スラっとした体系の黒髪の男の人。

「うそお・・・やだ! かつこよくなつたね!」

そして、その隣には、小さめサイズのかわいいワンピースを着た女の子の人。

「董!? 縮毛かけた? 可愛いね! 高校生っぽい!」

そして、また、その隣に男の人。

「ヒカリ・・・は、成長してないねえ。170あるの? ないの?」

ヒカリは、ムカっとした顔で、私に向かってきた。

「なんだよそれー! オレだって背伸びたじゃん! たくましく成長したじゃん! わるかっただなー! 169センチで!」

私は、笑いながら、まあまあと、とぼけた。

すると、陽介が、私の方を向いて、

「美海は、変わったな。」

「そう?」

「うん。3年経って綺麗になった。」

私は、少し下を向いて照れてから、陽介に向かって、えらそうな口でいった。

「私にホレた? ひざまずいちゃう? 陽介」

みんなが、美海を見つめ、

「おお・・・女王様っぷりは健在だ・・・」

と呟いた。そして、皆で噴出して笑った。

そして、3人とも、改めて

「おかえり! 美海!」

また、私たち4人がそろった。私たち、みんなこの島で育った幼馴染。中2の時、父の転勤で東京へ引越したけど、事情があって、1人、この島に戻って暮らす決意をした。

みんなで、笑っていたら、後ろで、船に乗った、おじさんが、

「おい! おめーら! めずらしく、沖にイルカが来てるってよ!」

「イルカ!?!」声をそろえて、言った。

「わ・・・あ!!! イルカだあつ!一緒に泳ぎたい!!! このまま海に入つていい?」

すると、陽介が、

「やめとけよ。海水で服がベタベタになる。」

「ええっ!?!」

私は、そんなーという感じで言った。

「私は、海怖いな、未だに泳げなくて・・・」

「それでも島っ娘!?!」

董は、もじもじしながら、そういった。

すると、ヒカリが、服を脱ぎ始め、

「まったく、お前ら野性味がなくてダメだなー。そんなんだからモテないんだよ！そして人生がパツとしないんだよ！美海だって、もっとワイルドな男が好きだよね。」

私は少し、顔を赤らめてしまった。ヒカリが太陽に照らされ眩しく見えた。

「さっ、美海行くぞ」

ヒカリは私の手をつかみ、船から真つ青な海へ飛び込んだ。

海の中で、目を開けると、そこには、ヒカリがいる。私は、ヒカリに笑いかけた。するとヒカリも、笑い返してくれた。ヒカリの後ろには、海の中で鮮やかに舞うイルカたち。

私は、この海の青が好き。光を吸い込んだ何もかも許す青。そうだ、私ずっと、この青に癒されたかった。

私が、水平線に顔を出し、目を開けると、そこには、何頭ものイルカが、私の周りを囲んでいた。イルカはキュルルと、かわいい鳴き声を私に振りかけた。

なぜ、イルカは、私の周りを囲んでいるのだろう。この島の人ならみんな知ってるイルカの習性。もちろんヒカリや陽介や董も知っている。3人は、私を見つめていた。

すると、陽介が、呟いた。

「イルカは、一番心の傷ついている人の側に寄り添うっつー話だよな。」

そして、私は気まずくも、陽介の家に4人でいった。陽介の家は民宿で、「民宿 かけい」って店。

そして、私は、陽介の家でお風呂にすることにした。

3人には、いつか、私が、この島に来た事情を話さなければならぬ。とは分かっていた。でも、まさか、こんな早く言うことになるなんて。イルカは全てを見透かしていた。

高校編入してまで、1人暮らしをしてまで、この島に戻ってきた理由が、なんとなく、じゃ通用しない。

私は、髪の水滴をたらしながら、3人の待つ部屋に戻った。

ドアを開けると、そこには、真剣な顔で、私を見ているヒカリと陽介と董がいた。

私は、話さなければならぬと決心した。すると、ヒカリ立ち上がり、

「何何！向こうの学校でいじめられた！？それとも、おじさんとおばさんがけんか・・・」

バシツヒカリが痛つてえ！と叫ぶ。陽介がヒカリの頭をたたいた。陽介は落ち着いた様子で

「無理に言わなくて良い。美海が言いたくなつたらその時に聞く・・・。今、悩みを口に出してますます悩む必要はない。」

「はあー！？何言つてんの！陽介！」

ヒカリは敵ついた顔で、陽介の服をつかんだ。

「俺は聞きたいよ！！聞かなきゃなんもわかんねーし！励ましようがねーじゃん！俺は美海のことなら、全部全部受け止めたい！！んで、受け止めたら、俺も悩んで、一緒に解決する！」

2人とも、とても優しい。私の事を考えてくれている。すると、手に暖かい温もりが伝わった。董が、私の手首にそつと、手を置いた。私は、董の方を見ると、董は、優しくニコツと笑ってくれた。

言いたい。みんなには言いたい。大切な仲間だから。たとえ、どうしようもないやつだと思われても。

私は、みんなの優しさに涙を流してしまった。そして、私は大きく口を開いた。

「私、失恋したの」

「付き合ってた人と別れて、ちょっと気持ちのバランス崩して、学校とか行けなくなっちゃって・・・失恋ぐらいでホントばかなんだけど」

私は、下を向いた。どう思ふかなくてギュツとこぶしを作った。私はそつと、上を向いてみると、陽介もヒカリも真剣な目で私をただ見つめていた。すると董が、少し涙を流して、

「バカみたいじゃないよ・・・恋したらぐちゃぐちゃにカッコ悪いの、

あたりまえのことだよ。」

そっか。もしかしたらみんな、もう恋を経験したのかな。痛むような、はりさけるようなあの気持ち。もう経験したのかな。この3年の間に私たちはどれくらい大人になっていたんだろう。

ヒカリは、大きく立ち上がり、

「ツシャァー！」と叫んだ。

「美海が落ち込んでるって知った以上、こんなとこでくさくさしてる場合じゃねえ！夏休み恒例、幸せの青いネコ探しに出かけるぞ！」
そして、私はヒカリに連れられ、幸せの青いネコ探しにいった。

1話（後書き）

私の、大好きな漫画を小説にしてみました！上手くかけていない部分もありますがご了承ください！承お願ひします！本当にごめんなさい！

2話

真夏なのに、私は必死に階段を登っている。

「前言撤回！！」

私は、息を切らしながらも、大きな声を出す。

「ぜんぜん、大人なんかになってないよ！董も陽介も！とくにヒカリ！！青いネコなんてまだ信じてんの！？」

すると、陽介が私に手を差し伸べて、

「島に伝わる伝説だろ。見つけてなでると願いが1個叶うっつー。」

そして、董が

「ただの青っぽい見える灰色の毛の”ロシアンブルー”って種類のネコって話もあるけど・・・」

董がそういうと、ヒカリが

「青いネコのしっぽには、鈴がついているらしい・・・その音を頼りに！！」

董の話聞いていない様子だ。

「ヒカリ、人の話聞いている？ロシアンブルーだって；」

そんな会話をしながらも、息を切らす。

にしても、本当に階段と坂の多い島だなあ・・・と改めて美海は思った。

青いネコ。なであれば1つ願いが叶うという・・・もし、見つければ、何を願おう。かなり凶々しいけど、この島で幸せな”新しい恋”ができますように”

すると、横の茂みから、チリーンという鈴の音が美海の耳に聞こえた。

「見つけた！鈴の音がした！」

とっさに、私は茂みの中に入ろうとすると

「美海！茂みに入るな！！この辺はへビが・・・」

そうヒカリが言おうとした途端、美海の肩の上から、へビが顔を出

した。そして噛まれてしまった。

「っ……」

「きゃあー！噛まれた美海ちゃん！！」
董が叫ぶ。

「肩……」

ヒカリが声を出す。

「忘れてた……。島でへビが出るって」

私は3年間の間に忘れてしまっていた。この島のことを。

陽介は落ち着いて、

「毒があつたらヤバいからとりあえず坂の下の病院に……。俺にかまって……」

すると、ヒカリが、

「美海ごめん。服やぶく。」

そう呟き、ヒカリは、私の肩らへんの服をやぶき、噛まれた部分に唇をあて、吸った。すると、へビの歯の破片が出てきた。ヒカリはペツと吐き出し、また、美海の肩に唇をあて吸う。

美海は何となくこしょばい気がして、

「っっ」

と顔を真っ赤にして、嘆く。

ヒカリは吸い終わると、美海を抱き上げ、階段を下りていった。

「病院いかねーと」

「きゃっ」

走って階段を下りていく。

「ヒカリ危ない！ころがり落ちるぞ」

と、陽介が大きな声で言う。美海はきゃーと叫んでいる。

陽介と董だけ残されてしまった。

「いつちやった」

「あ……」

陽介が、冷ました顔をして

「この島に人が死ぬほどの毒があるへビいねーと思うけど」

そう陽介が言うと、董は、俯き、泣きそうな顔をした。

「昔から変わってないね。ヒカリ。」

そう呟く。陽介はただじっと董を見ている。

「美海ちゃんのことになると必死。」

そう言う董は涙をこらえているように思えた。

ヒカリは美海を抱き上げ坂下の病院まで、走って連れて行った。

病院で、診察室に入り、ヒカリは「ゼーはーゼーはー」と息を切らしている。

「はいっ。とりあえず絆創膏を貼っておきましたよ。」

看護婦さんが、笑いながら、

「いい彼氏ねー。彼女が島へびに噛まれたぐらいで病院にとんでくるなんて」

といった。ヒカリは汗をだらだらにかいている。

ヒカリは、私のことになると必死。それは昔から気づいてた。

ヒカリと美海は、青い空の下の道で、手を繋ぎ、とことことゆっくり歩いていた。とても健やかな時間に思えた。

”成長してない”なんて嘘だよ。同じくらいだった手が、大きくなった。優しくただだけの目に、強い光が宿っていた。この背中ももう、男のコじゃなくて、男の人のものなんだ。ぜんぶ気づいてたけど、気づいてないフリをしていた。

そんなことを考えていたら、後ろでチリンツと鈴の音がした。2人で後ろを向くと、そこには、しっぽに、鈴をつけた、ネコがいた。

ネコはニャーとかわいらしい声で鳴いた。一瞬見つめていると、ネコは茂みの中に入っていつてしまった。

「見た・・・今の。灰色に近いけどちゃんと青い毛してた。」

美海が呟く。ヒカリは、今だに驚いた様子で

「青いネコ!!! 伝説の!!! 俺たち幸せになれるんじゃない・・・」

ヒカリはハツとした様子で、私の肩を持ち、見つめている。

あれ、ヒカリ今、何か言おうとしている・・・?

「言うっ！！かなりフライングだけど、今言うっ！！だって美海、美人だしっ！！学校始まつたら他の男らも言うっだろーし・俺が一番に言うっ！！」

私は、すぐにヒカリの言いたいことが分かった。私は、耳をふさぎ、目をギュツとつぶった。

「美海、俺、子供ん時から美海のこと・・・」
バチツツ

私は、思いつきりヒカリの頬をビンタした。ヒカリは驚いて、そこに座って

「・・・なっ・・・」

私はすぐに走り出した。

「みつ美海！！！！ちよっなんで！！！！」

すると、美海のズボンの後ろのポケットから、携帯が落ちてしまった。

「美海・・・携帯落とし・・・」

ヒカリが拾おうとする。

私はすぐに引き戻し、携帯をヒカリから強引に取った。だけど、ヒカリに携帯の待ちうけを見られてしまった。

私は、泣きそうだった。きつと、ヒカリから見たら、私はとても情けない顔をしているだろう。

「待ちうけの・・・それ・・・元カレ？でもかなり年上っぽいような」

ヒカリにだけは知られたくない。私が東京の高校を退学したのは、先生との恋がバレちゃったせいだって

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9229i/>

BLUE - 空色*水色*恋の色 -

2010年10月10日15時24分発行